

トルコ共和国首都アンカラの都市開発と住民～Dikmen Vadisi Halk<sub>1</sub> を事例に～  
Urbanization and Residents in Ankara Turkey  
～A Case Study from Dikmen Vadisi Halk<sub>1</sub>～

人間文化創成科学研究科  
ジェンダー社会科学専攻 M2 小川杏子

1. 要約

(和文)

トルコ共和国の首都アンカラでは、建国以来、都市空間の拡大に伴って、ゲジェコンドゥと呼ばれる不法占拠住宅地区が形成されてきた。こうした住宅地区に住む人々は、しばしば首都開発計画や都市空間の整備にともない、居住地区の建て替えやそこからの立ち退きを迫られてきた。こうした傾向は、1980年以降の新自由主義的な都市開発政策の中で一層強まっており、都心周辺部のゲジェコンドゥは次々に富裕層や中産階級向けの高層集合住宅地区に置き換わっている。しかし、一方でその流れに抵抗し、住民が立ち退きを拒んで、自らが慣れ親しんだ居住地を守ろうとする運動も見られる。

本調査研究では、トルコ共和国首都のアンカラ市の首都開発計画プロジェクトの現状を明らかにするとともに、それに対して抵抗運動を続けている代表的なゲジェコンドゥである DikmenVadisi 地区の住民組織 DikmenVadisi Halk<sub>1</sub> に焦点を当てる。同地区の住民および支援者から聞き取りを行い、具体的な活動を明らかにする。

また、ルフェーブルに代表的なように、近年の地理学の研究において、空間/場所は一面から捉えられるものではなく、多面的なものと捉えられている。しかしながら、トルコ共和国におけるゲジェコンドゥについての研究ではその点において十分ではない。そのため、本研究ではゲジェコンドゥをめぐる都市再開発の動きをグローバル・ナショナル・ローカルなレベルから捉えなおし、多面的に現状を明らかにする。

(英文)

Since the Republic of Turkey was founded in 1923, squatter settlement called “gecekondü” has developed along with the expansion of urban space in Ankara, the capital city of Turkey. However, the squatters have often been relocated to another location or forced to rebuild their shelter as the urban space has developed. Especially, neo-liberal urban development policy since the 1980s has intensified the oppression promoting gentrification for wealthier residents and businesses. On the other hand, there has been movement among the squatters which resists this trend and protects their place.

In this study, I aim to investigate the recent situation of the urban planning in Ankara from the perspective of the squatters. In order to achieve this aim, I will focus on their organization in Dikmen Vadisi district where typical gecekondu is seen. From the interviews with the supporters, I will reveal the way in which they promote movement.

In recent years, in the study of geography space / place are regarded as its manifold phenomenon as Lefevre. However, it is not sufficient in that respect in the study of about Gecekondu in Turkey. Therefore, in this study, I aim to re-consider about Gecekondu problem from the Global , National and Local viewpoints.

2. 調査期間:2013年8月18日～2013年9月12日(調査地:トルコ共和国アンカラ市)

### 3. 調査背景

研究対象地域であるトルコ共和国の首都アンカラでは、建国以来、都市空間の拡大に伴って、ゲジェコンドゥと呼ばれる不法占拠住宅地区が形成されてきた。こうした住宅地区に住む人々は、しばしば首都開発計画や都市空間の整備にともない、居住地区の建て替えやそこからの立ち退きを迫られてきた。こうした傾向は、1980年以降の自由主義的な都市開発政策の中で一層強まっており、都心周辺部のゲジェコンドゥは次々に富裕層や中産階級向けの高層集合住宅地区に置き換わっている。アンカラ市においてはその後も2004年に「アンカラ北部のゲジェコンドゥ地域の Urban-regeneration のための法律」が通過し、1万5千のゲジェコンドゥを含む1600万㎡が再開発の対象となるなど、都市再開発が進んでいる。

しかし、一方でその流れに抵抗し、住民が立ち退きを拒んで、自らが慣れ親しんだ居住地を守ろうとする運動も見られる。本調査研究において対象にしようとするアンカラ市の Dikmen Vadisi はその顕著な事例である。Dikmen Vadisi においても、1984年に住宅環境開発プロジェクト<sup>1</sup>が計画されて以降、公園・公共施設・高層住宅の建設を目的とした再開発が進められている。ここでは Halkevleri を中心とした支援を背景に Dikmen Vadisi Halkı という組織を中心に抵抗運動が続けられている。彼らはなぜ、どのように、どのような組織でその運動を行っているのだろうか、本調査ではこの点について明らかにしたいと考えている。

---

<sup>1</sup> 158haの土地(1989年時点では2300の不法住宅・9809人の居住者)とするものであり、名目上は「都市の大気汚染を解消するための緑地化計画」とされていた。

#### 4. 調査目的

本調査研究では、トルコ共和国首都のアンカラ市の首都開発計画プロジェクトの現状を明らかにするとともに、それに対して抵抗運動を続けている代表的なゲジェコンドゥである **DikmenVadisi** 地区の住民組織 **DikmenVadisi Halk<sup>1</sup>** に焦点を当てる。同地区の住民および支援者から聞き取りを行い、具体的な活動を明らかにする。

地理学の都市空間をめぐる研究においては、ルフェーブルに代表的なように、空間/場所は権力によって空間/場所が表象されるという議論があると同時に人々の日常生活が営まれる、抵抗の場として空間/場所が捉えられる議論がある。このように、空間/場所は一面から捉えられるものではなく、多面的なものなのである。しかしながら、アンカラの都市空間および特にゲジェコンドゥ地域をめぐる先行研究においては、都市の再開発をめぐる研究はなされている一方で、それを政治的・社会的な文脈を含めて論じているものは少なく、その点で多面的な分析が重要である。それゆえに本研究はゲジェコンドゥをめぐる都市再開発の動きをグローバル・ナショナル・ローカルなレベルから捉えなおし、現状を明らかにすることを目的とする。

#### 5. 調査方法

今回の調査では、前述の通り、トルコ共和国の首都アンカラ市を訪れ、図書館や大学での関連資料収集およびビルケント大学建築学科 **Batuman** 助教授から聞き取りをおこなうとともに、対象地域である **Dikmen Vadisi** における抵抗運動組織を中心に現地調査を行う。調査方法は、参与観察・インタビュー調査・文献収集が主となる。具体的な調査内容と方法は、以下のとおりである。

第1にアンカラの都市政策、住宅政策について、関係組織 (**Halkevleri**, **TMMOB<sup>2</sup>**)、研究者 (ビルケント大学 **Batuman** 助教授) から聞き取りを行う。第2に、ゲジェコンドゥ住民の運動について、どのような歴史的背景のもとに形成され、組織構成および中心的構成員の社会的背景はどのようになっているのか、また、活動の経緯・実態について明らかにする。第3に、支援団体 (**Halkevleri**, **TMMOB**) がどういった社会的背景のもとに、なぜ、どのように支援に関わっているのかを、インタビュー調査を軸に考察する。第5に、関連文献 (アンカラ郷土史ほか) および行政資料 (地図を含む) を収集し、分析を行う。

---

<sup>2</sup> **Halkevleri** とは「人民の家」と呼ばれる組織であり、建国以降トルコ国家のナショナリズムを支えてきた文化組織であるが、政権の変遷を受けて、現在では農民や貧困層に焦点を当てた支援活動を行っている団体である。また、**TMMOB** とはトルコ建築家協会の略称であり、建築家協会はアンカラ・イスタンブールといった大都市のゲジェコンドゥにネットワークを持ちながら彼らの活動の支援を行っている組織である。両者とも出版物を出すなどゲジェコンドゥの活動を社会に示す活動を行っており、特に後者は大学の教授とも連携を取りながら活動をしている。

## 6. 調査結果

今回の現地調査では、インタビュー調査および文献収集を行った。本報告では、インタビュー調査および現地調査で得られたことを中心に、以下5点に分けて報告する。

第1に現地調査によって得られた開発の現状、第2に **Dikmen Vadisi** におけるインタビュー調査および他のゲジエコンドゥの住民へのインタビューによって得られたこと、第3に9月4日に行われたある抗議運動について、第4に支援団体への訪問によって得られた現状、最後に現地で生活する中で得られたことについて報告する。

なお、現在進行形で進んでいる問題ということで、仲介者および先方の都合上、日程及び調査内容の変更があったことをはじめに注記しておく。具体的には、第1に、**Dikmen Vadisi** での調査においては、代表者である **Tarik Çalşkan** へのインタビューが中心となった。第2に **TMMOB** の代表者へのインタビューは当日デモ活動が起こったため短いものとなり、**Halkevleri** の代表者へのインタビューは代表者不在のため行うことができず、**Halkevleri** のメンバーの1人から簡単なインタビュー調査を行った。

## 7. アンカラ広域市における **Dikmen Vadisi** 開発の現状

### 7-1. アンカラ広域市の政策

まず、トルコ共和国の行政の仕組みについて簡単に述べておきたい。**Büyük Şehir Belediyesi**、いわゆる「広域市」と呼ばれる都市が5つある。アンカラ市もその1つであり、その行政区分の下にさらに小さな区分がある。調査対象地域である **Dikmen Vadisi** はアンカラ広域市のチャンカヤ市の管轄下にある。

現在、アンカラ広域市の代表はトルコ共和国政権与党の **AKP**<sup>3</sup>所属のメリー・ギョクチュクであるが、チャンカヤ市の代表は政権野党である **CHP**<sup>4</sup>所属の議員である。今回の調査では、このことに関して、「(アンカラ広域市とは考えが違うが) …チャンカヤ市とは時々考えが一緒<sup>5</sup>」といった語りが聞かれた。**Dikmen Vadisi** の開発政策を進めているのはアンカラ広域市であり、行政区分の構造上、チャンカヤ市は広域市の決定に逆らうことが難しいという<sup>6</sup>。これらのことも踏まえ、今後その背景に関してはさらなる分析が必要であるが、抵抗運動をする人々およびそれを支援する人々の間で、アンカラ広域市とチャンカヤ市へのまなざしが異なると考えられる。

---

<sup>3</sup> **AKP** とは公正発展党であり、中道右派のイスラム色の強い保守系の政党である。2002年秋の総選挙で勝利し、2011年の総選挙でも50%の得票率で第一党となり、現在も政権を握る。

<sup>4</sup> **CHP** とは共和人民党のことである。この政党は1923年にムスタファ・ケマル・アタテュルクに創設された。現在は最大野党であり、左派政党として、アタテュルク主義や国家主義、社会民主主義的立場を主張。

<sup>5</sup> 9月6日 **TMMOB** でのインタビュー調査より

<sup>6</sup> チャンカヤ市も「都市空間の美化」は進めており、2013年3月に訪れた際には工事が行われていたチャンカヤ市の庁舎周辺が、今回の訪問の際にはきれいに整備されていた。また、公園等の建設の際には、必ずチャンカヤのロゴマークが入れられている。

## 7-2. 開発の現状について

8月2日 Dikmen Vadisi の現状を知るために、首都開発計画が進められている Dikmen Vadisi を訪れた。現在の首都開発計画では、1986年に計画された、2015年までのプランに基づいて開発が進められている。Dikmen Vadisi もその一つの地区である。Dikmen Vadisi では、5つの Etap (ステージ) に分けて計画が進められており、現在は5Etapまで進んでいる。



【写真1】3Etap 地区の様子



【写真2】5Etap の様子  
現在開発が進められているのが分かる

## 8. Dikmen Vadisi Halk<sup>1</sup> の調査

今回の調査では、ある住民集会の開催された9月1日に Dikmen Vadisi を訪れた。この集会は、約6か月前の2月か3月にここで警官隊との小競り合いがあった際に警官隊に逮捕されたイブラヒム氏のために開かれたものであった<sup>7</sup>。彼は、警官隊が来た際に、自分を守るため、私たちも鉄砲を持っているということを示すために偽物の鉄砲で空に発砲したが、それが原因で逮捕された<sup>8</sup>。この集会は次の水曜日(9月4日)にアンカラの裁判所前で、イブラヒム氏の逮捕への抗議活動に向けてのものであった。Dikmen Vadisi では毎週土曜日に政治の問題や活動について話し合う集会があるが、日曜日に開かれたこの集会は特別な集会である。

女性も男性も、そして若者も約50人以上が集まったこの集会では、住民組織の代表である Tarik Çarışkan がスピーチをしていた。以下、Tarik 氏のスピーチおよびインタビューと、イブラヒム氏のための抗議活動(9月4日)当日の調査をもとに調査結果をまとめる。

### 8-1. 住民組織代表 Tarik Çarışkan について

ここでは、本人の語りをもとに、Tarik Çarışkan について簡単に述べておく。Tarik 氏

<sup>7</sup> 現地に案内をしてくれた大学生 Elif Cabadak および住民の女性の説明による。

<sup>8</sup> 同じく Elif の説明による。現在は16年~25年刑務所に入るかもしれないし、どうなるか分からない状況であるということであった。

は現在 63 歳で妻・娘・息子の 4 人家族である。33 年前に Erzincan(東アナトリア地方の一都市)からアンカラに移り住み<sup>9</sup>、最初は 1 人で後に家族を呼び寄せ、現在まで暮らしている。彼は、「Erzincan から、最初はきれいな素敵な世界を見つけるという夢を見て来た。」という。1974 年には ODTU に入学するが、1980 年に退学、その後は貿易の仕事をしながらか、Halkevleri で活動をし、代表を務めていた。8 年前に Halkevleri でともに働いていた友人も含めた 4 人<sup>10</sup>とともに組織を立ち上げ、彼が最初の代表である。



【写真 3】 DikmenVadisi Halk<sup>1</sup> 事務所にて

## 8-2. DikmenVadisi における住民および活動の現状 ～インタビュー調査より～

Tarik 氏によると、Dikmen Vadisi には約 2300 人が居住し、約 600 の家族がいる。そのうち約 500 人が子どもで、約 700 人が女性、約 1000 人が男性である。彼らは主に、東アナトリア地方である Kars, Sivasi, Corum, Erzincan, Elazig, Malatya の村から都市へやってきた。理由の多くは先行研究でも多く指摘されているように、金銭面の問題であり、仕事をするためにアンカラにやって来た人々である。昔は 2004 ほどの家があったとのことだが、「お金がある人」は広域市が家を倒しに来た後に別のところへ行ってしまい、600 の本当に貧しい家族だけが抵抗している<sup>11</sup> というのが現状のようである。

また、実際にここの活動に参加しているのは、約 150 人であるという。トルコでは貧しい人々にコリー（水や食料の入った箱）を渡す仕組みが行政にあるが、本当に貧しい人々はそれがなくなってしまうと生活できない。Dikmen Vadisi での抵抗運動に加わってしまうと、そのコリーがもらえなくなるのではないかという不安があるということがその背景のようである。

彼らの活動へは Halkevleri や TMMOB といった組織も間接的な支援<sup>12</sup>を行っているが、

<sup>9</sup>語りからは DikmenVadisi に最初から来たかどうか不明。

<sup>10</sup>うち 3 人が Halkevleri の友人である。現在、1 人はアンカラ、他はイスタンブールに住んでおり、1 人はアパートに、他の 3 人はゲジェコンドゥに住んでいる。

<sup>11</sup> Tarik 氏の語りより

<sup>12</sup> ポスター作製のための費用など。

毎月の抵抗運動（Mücadele）のために一家族 20 リラ払うこととなっており、これが彼らの主な活動資金である。

### 8-3.インタビューからみられる抵抗運動の方針～女性の重要性と「1960年の命」～

今回の会議および後述するイブラヒム氏のための抗議活動においても、男性だけでなく多くの女性の参加がみられた。普段の会議や活動には、男性だけでなく女性も参加するというので、Tarik 氏は以下のようにその理由を語っていた。「組織では女性がいなくなったら意味がない。…男性はいつも自分で来るが、女性を呼ぶのは難しい。」Tarik 氏はインタビューの中で自分たちの活動において、女性の役割が重要であると述べていた。以下、Tarik 氏の発言を引用する。

「女性は女の気持ちがある。感情を表す必要がある。家は女性の城。それを守るために何かするべき。最初は男性だけ。女性には挨拶もできなかった。女性の大切さを訴えたら、来るようになった。市が来て家を倒すようにする時はいつもその前に女性がいる。…トルコでは女たちはいつも男性の許可がなかったら買い物にも行けない。…女性を大切にすることは、ヨーロッパとかの重役を見れば、女性がいなかったら失敗。女性がいなかったら国も良くならない。よくならない。成功しない。そのために、女性はいつもの組織でも女性の大切さを知っていた。…女性は生きる場所を守るために何でもできる。」

この発言からは、Tarik 氏の活動において女性の存在が重要であるという姿勢を読み取ることができる。

また、Dikmen Vadisi の昔の様子を質問した際の以下の解答からは、「1960年の命」というものが、Tarik 氏の中で活動の方針の1つとなっていることが伺える。

「ここは、大きい森があるところでした。最初は 1960 年ごろ人が来るようになった。その時の人々はこの地を分けてみんなにくれた。その時はみんな友人で仲が良かった。1980 年の後はみんなは国民としての権利を忘れるようになって、自分のことを考えるようになった。1960 年のみんなの考えをもう一度復活させるように動いている。どこかで悪いことがあったら、この人も応援に行く。それが 1960 年の命。」

「ゲズィのデモ、シリアでのことに参加することと関係がある。」

「ゲズィのことで、本当にいい状況になった。11 年間 AKP に怒って待っていて、コップの中の水のように上に上に上がって…。最初はみんなもう嫌と思った。そこからが重要。毎晩公園でフォーラムを行った。1960 年の国民の権利とかをよく思い起こして、それを今はここからみんな平和に生きるようにしたい。…ゲズィのことも考えながら全トルコの国民組織のために頑張る。」

## 9. イブラヒム氏のための抗議活動より

ここでは、9 月 4 日の抗議活動の様子とそこで出会った人々への簡単な聞き取りについて述べていく。





【写真 4】 裁判所前での抗議運動



【写真 5】 CHP の国会議員

### 9-1. 抗議活動の様子

抗議活動はアンカラの **Suhie** にある裁判所前で行われた。実際に抗議活動が行われた場所は、**Dikmen Vadisi** の人々が抗議活動をする前にも他団体が抗議行動を行っていた場所であった。また、当日は 5 社ほどの報道関係者の姿も見られた。写真 4 から分かるように、多くの住民がこの抗議活動に参加し、若者の姿も多く目立った<sup>13</sup>。**Tarik** 氏のスピーチ、住民男性による呼びかけを間にはさみながら、「私たちには **Barınma Hakkı**(居住権) がある」「**イブラヒム**氏が捕まったのは不当だ」というシュプレヒコールをあげる形で約 20 分ほど続いた。また、途中では、CHP の国会議員である **Aylin Nazliaka** がスピーチする場面も見られた<sup>14</sup>。彼らの使用しているプラカードは **Halkevleri** で用意したものであり、他のゲジェコンドゥの抗議行動でも見られるものである。

ここからは、ある意味政治的な立場を読みとることも可能かもしれないが、9 月 1 日のインタビューにおいては、「この人 (**Dikmen Vadisi** の人) は自分の生活のための戦いをするので、両方 (右派・左派) のグループがいる。「政治の問題ではなく、生活の問題だ。」と述べていたことをここで注記しておく。

### 9-2. 他の組織とのネットワーク

当日はアンカラのもう 1 つの **Gecekondu** 地区であるの **Mamak** の人々<sup>15</sup>も参加していた。彼らはこの活動を応援するためにやって来たということであった。以下、彼らへのインタビューから **Mamak** の現状と **Dikmen Vadisi** との結びつきについて述べておく。**Mamak**, **Ismet pasa**, **Dikmen** の **Gecekondu** の人々はお互いにネットワークを持って活動をしており、都市開発が始まってから最初に活動を始めたのが **Dikmen** なのである。だからこそ、「一番アクティブな活動をしている。」「ここからいろんなことを学んでいる。」のである。彼らは **Halkevleri** が最初にネットワークを持って活動を始めたのを土台とし、現在はインターネットや **Facebook** をつかってつながりを持って活動をしているようである。

<sup>13</sup> その一部は **Halkevleri** のメンバーの若者であった。ただし、彼らが **Dikmen Vadisi** の住民であるかは不明である。

<sup>14</sup> また、抗議活動終了後は、住民女性が **Aylin Nazliaka** を囲み、一緒に記念撮影をするといった姿もみられた。

<sup>15</sup> **Hüsni Plelus** 氏と **Fusf Keser** 氏から話を伺った



「Mamak でも同じような状況。だからこそここに来て、また Dikmen や Pasa の人々と話をして、自分たちが何ができるか、何をしたらどうなるのか、ということを考える。」という言葉から分かるように、アンカラ広域市内の各 Gecekondu の組織とお互いに情報を共有しながら活動が行われているのである。また、インタビューによると、イスタンブール、イズミル、アダナといった地域の人々とも、状況は異なるが情報を共有しているようである。

このように、Dikmen Vadisi における住民の活動は、他の組織との結びつきを持ちながら進められているのである。そのことは 9 月 1 日の Tarik 氏へのインタビューにおいてもうかがえたので、ここで注記しておく。Dikmen Vadisi の住民組織は他の組織ともつながりがあり、キューバ、アメリカ、ラテンアメリカ、ブラジル、アルゼンチンといった国の組織と結びつきがあるようである。また、現時点までに 23 の国の組織の人々と話をしたということであった<sup>16</sup>。

## 10. 支援団体への訪問・インタビュー調査

### 10-1.TMMOB

アンカラ支部の代表である TezCan 氏は Gazi 大学で学んだ後この TMMOB で働いており、現在はチャンカヤ市のパートタイム労働をしながらこの団体の代表を務めている。他には、建築家、大学の教授など、建築に関わる多くの人々が所属している。

「建築家協会は助中の権利を守る会議やエキシビションを行う。すべての人は健康の権利を持っている。私たちはスラムをサポートし、ジェントリフィケーションを支援はしない。…この問題に対して怒っている。土地を利益が得られるものへと改良しようとしている。」

TMMOB はその名前の通り、トルコの建築家の人々が所属する団体である。ここで詳細を述べることは避けるが、大学において学生運動が盛んであった 1960 年代に学生であった世代が組織の中心になって以降、政府の建設計画に意見をするようになり、その姿勢が変化している。この発言から読み取れるように、現在の都市開発政策について、批判的な立場をとるとともに、人々の「権利」を守るための組織として建築家という専門家の立場から活動を行っている。TMMOB では具体的には、本を提供したり、テクニカル・サポートをしたり、本を出版したり、勉強の支援をしたりしている。また、アンカラ支部では子どもたちに対してアナトリアのいろいろな場所でキャンプを行っており、「芸術活動、都市・文化の活動」を経験させている。

活動は他の国内・国際両方の建築協会との連携をとって行われており、具体的には UIA と呼ばれるヨーロッパの建築家協会とのコネクションを持って活動が進められている。また、資金に関しては、建築家が入っている組織向けにいくつかのプログラムを行い、そこ

---

<sup>16</sup> 彼らがどのように Dikmen Vadisi にやってくるのか尋ねたところ、「インターネットで調べて、トルコ人とどこかで出会って、私はここに行きたいと言ってきた」と述べており、必ずしも仲介者がいるということではないようである。

から収入を得るといった方法もとられているとのことである。

## 10-2.Halkevleri

Halkevleri では、詳細なインタビューが行うことができなかつたため、以下 2 点基本的な事柄について、調査で得られたことを述べておく。

Gecekondu に関しては「家を壊しに来た時に一緒に抵抗」をしたり、「署名が必要な時に、政府（または行政）が言っていることが本当に正しいかどうか、建築家たちと一緒に相談をする」といった活動が行われている。Halkevleri のメンバーは外で仕事をもち収入を得ながら、ここでの活動をしているとのことであった<sup>17</sup>。

## 11. その他

ここではその他、日常生活の中で得たことを述べておく。今回滞在期間中、複数の現地の人と Gecekondu について話す機会を得た。私が話した多くの人は、大学での教育を受けたいわゆる中流階級の人々である。私自身の研究テーマを話す中で受けたのが、「なぜ Gecekondu の人たちは抵抗しているの？」「新しい家をもらえるのにどうして移動しないの？」という質問であった。また、「Gecekondu の人々は国からお金をもらって新しい家ももらえると聞いたことがあるのに、どうして？」という形での問いかけもあった。今回の調査では具体的に Gecekondu 以外に住む人々の意識調査は含まれていないが、こういった人々の Gecekondu へのまなざしに関しても、現在 Gecekondu の人々が置かれている社会的状況を考える上で重要な点となってくるため、ここで指摘しておくとともに、今後の課題としたい。

## 12. 考察・結論

現在トルコ共和国における都市開発は大きな局面を迎えている。多くの研究者から「あと 2 年でゲジェコンドゥはみられなくなるだろう」ということが話題にあがったように、2015 年までの計画が進められているからである。Dikmen Vadisi 地区も例外ではなく、上記のように、現在最後のステージまでその開発が進められている。

最初に述べたように、このことをグローバル・ナショナル・ローカルなレベルから再考することが今回の調査の目的であり、この視点から簡単に考察をし、現段階でのまとめとしたい。

今回の調査では、報告で指摘したように、国内の各組織の結びつきだけでなく、国外組織との結びつきについての話が聞かれた。さらに、支援組織である TMMOB も世界各地の建築家組織と連動し、1995 年の Habitat で提唱された「居住権」というものを掲げて活動を行っている<sup>18</sup>。つまり、こういったナショナルな枠組みを越えたネットワークおよ

---

<sup>17</sup> オフィスがあり夜 19 時まで開いている。そこで働いている人々、代表者については不明。

<sup>18</sup> ただし、「居住権」という言葉がいつから彼らの活動において出てきたかということに

び視点というものが、現在の **Gecekondu** の人々の活動を支える上で、さらにはその活動を捉えるうえで重要であるといえるのである。また、詳細はここでは省略するが、**Gecekondu** をめぐる政策の変化にもグローバルな流れが大きな影響を与えている点についても指摘しておく<sup>19</sup>。

また、一方で、グローバルな視点だけではなく、ナショナル、ローカルな視点も重要である。**Tarik** 氏の発言には、現政権である **AKP** への不満や国全体のことを考える「1960年の命」といったナショナルなレベルでの視点がみられる一方で、自分たちの抵抗運動を捉えるまなざしは「政治の問題ではなく、生活の問題だ」といったようにローカルな視点もみられる。イブラヒム氏のための抗議運動では、**CHP** の現国会議員による **Dikmen Vadisi** 住民の側に立っての応援演説が行われた。これは、政治的な意図も無視できず、**Dikmen Vadisi** の出来事がある意味ナショナルな政治の「道具」として使われている1つの例と捉えることができる。

このように、今後さらに詳細にわたる分析が必要であるが、アンカラ市 **Dikmen Vadisi** の **Gecekondu** をめぐる現状は、グローバル・ナショナル・ローカルな事象が複層的に複雑に関わりあいながら動いているといえるのである。今後は現地の調査で得た資料とも照らし合わせながら、さらに考察をすすめたい。

### 13. 今後の研究への展望

今回の調査は、短期間の調査および通訳を介しての調査ということもあり、人々の内面にまで踏み込んだ調査には至らなかった。しかしながら、今後の調査につながるネットワークをつくることができたと同時に、今まで見えて来なかった当事者の生の声を聞くことができたことによって、今後の課題も明らかとなった。

今回は上記のように全体的事柄についての調査にとどまったが、今後は今回の結果を踏まえ、以下の2点から研究を深めていくことが重要であると考えられる。

第1に「記憶」「場所」とアイデンティティの問題である。今回の調査でも **Mamak** の人々から「自分たちが育ってきた場所だから…」という話が聞かれたように、「過去」や「場

---

についてはさらに調査が必要であり、**Habitat** の与えた影響についても今後さらなる調査検討が必要である。

<sup>19</sup>世界的に1980年代以降隆盛を迎えた、ネオリベリズムが、トルコ共和国においても同様に政策にも大きな影響を与えるようになり、現政権の政策へと結びついている。1980年代以降になると政治的な変化により、地方政府が力を持つようになるが、この時代はネオリベリズム的政治へと変化していくと同時に、ネオリベリズムの戦略を用いた経済回復がはかられ、都市空間が大規模に利用されるようになった時代である。つまり、地方政府主導のネオリベリズム的な都市開発が進むのである。1984年の自治体法によって広域市が造られると、地方主導の都市開発がさらに強く進むこととなり、アンカラ市においても1985年に「第4次アンカラ首都圏開発計画」の素案が中東工科大学との共同作業によって発表され、ゲジェコンドゥ地区の改良と大規模郊外住宅地の開発などが計画された。このように、トルコ共和国においてもグローバルな流れの影響を受け、今日に続くような都市再開発が進んだのである。

所」というものが、現在の彼らの運動のアイデンティティの基盤の1つとなっている可能性が考えられる。今後、具体的な住民へのインタビューを通じて Gecekondu の人々の内面に迫る中で、他の「場所」へ「移動」をすることに抵抗をする、ということがどういうことなのか、こういった視点から考えることが彼らのアイデンティティについて考察へとつながるものとなる。

第2にトルコ共和国における「市民運動」のメカニズムである。今回の滞在期間中、エジプトやシリアに関わるデモ、中東工科大学での道路整備のための伐採への反対運動、さらには5月のデモの余波のデモ等、様々な運動が次々と起こっていた。Tarik 氏のスピーチの中でも見られたように、また Gecekondu の支援をしている人々が中東工科大学での反対運動に参加していたように、こうした様々な動きと Gecekondu の人々の抵抗運動というものは複雑に関わっている。それゆえに、今後この点に関しての考察も重要であると考える。アラブの春以降、ソーシャルメディアが市民運動、革命に与える影響というものが中東において取りざたされてきたが、そこにはいくつかの疑問の余地もある。現在もトルコ共和国においては、さまざまな問題をめぐって「市民運動」が起き、それらが相互に関わりあっている。こういった動きはどのように沸き起こってくるのだろうか、この点に関しても今後の課題としたい。

#### 14. 主な参考文献

- ・新井政美『トルコ近現代史』みすず書房 2001
- ・加納弘勝「アンカラのスラム—社会経済危機と自暴自棄型の社会的態度」『アジア経済』25-4 pp.40-62
- ・澤江史子 『現代トルコの民主政治とイスラーム』ナカニシヤ出版 2005
- ・村上薫「アンカラ」『岩波 イスラーム辞典』岩波書店
- ・村上薫「トルコの「新しい貧困」問題」『現代の中東』41 2005
- ・Bülent Batuman, “City profile: Ankara”, *Cities*, 2012
- ・Özlem Dündar, “The Dikmen Valley squatter housing renewal project in Ankara”, *Ekistics*, 63, pp.116-126, 1996
- ・Tahire Erman “Urbanization and urbanism”, *The routledge handbook of modern turkey*, 2012, NY